

## 『井上晴丸先生の人と業績』

### 晴丸さんの思い出

建林 正喜

ここに晴丸さんのお写真が出ていますが、和服姿で、これはあるいは入院中のお写真じゃないか、すこしやっ  
れておられるように思うのです。

私が立命館へきましたのは、昭和三九年四月からです。当時立命館に井上先生が三人おりました。井上巖次郎先生、これは経済政策、中小企業論や社会政策の先生、それに国際経済論の井上次郎先生、それからもう一人が井上晴丸先生、そこへもってきて事務長が井上さん、さらに事務に井上君と、計五人の井上さんが経済学部に住  
たわけです。それで教授会では巖次郎さん、次郎さん、晴丸さんというふうに、三人を名前で呼びかけたのです。そのくせがいまだに残っておることもあって井上先生がひとりだけになったあとも、やはり晴丸さんと呼んでき  
たわけです。それに井上さんには、どうしても晴丸さんといわないと、彼の人柄が浮んでこないような、そうい  
うひとなつっこい気もちがするのです。

もつともきょうは井上先生の学問的な業績を中心にして、あとで大藪先生からいろいろお話があることで、そしてそれが本日の集まりの主眼になっておりますし、それにある人の人柄というのは、なかなか多面的ですから、決して短い時間で、こういうひとだ、ああいうひとだというようなことを言ったところで、これはとうてい十分語ることはできない。のみならず私と先生とのおつき合いは、さきほども言いましたように、立命館へまいりまして一〇年のつき合いです。大学には、私よりもっと古くから井上先生とおつき合いをなされておる方々がたくさんいらっしゃる。そういうかたを差しおいて私がここで井上先生の想い出を語るということは、これまた私が来年定年で、先生と定年になったら行く大学も決まっておった中で先生が急になくなられたような因縁もあったものですから、そういう因縁で私にこういう機会を与えられたんだろうと思うわけです。

昭和三八年の夏、いまはなくなった経済学部教授の手嶋君が私のところへやってきまして、どうだ、ひとつ立命館大学へ行こうじゃないかと、こういう話をひょっこりもちかけたわけです。

立命館大学総長の末川先生はじつは私と同郷の、同じ村の先輩でございまして、末川先生のいちばん下の弟さんが私と中学で同期生でした。それで末川先生のお名前は、かねがね中学生のときから知っておりましたし、たまたま私が京都に居を構えるようになった昭和一二年から三年、四年にかけまして、しばしばあの東福ノ川の末川先生のお宅へお伺いした因縁もございまして。そういうことで、実は私の気もちも大いに動きまして、それじゃひとつ考えてみようかという矢先に井上晴丸さんが広島へ私を口説きにやってきましたわけです。ところが彼は、私を口説きにやってきたんだけど、私を口説かないで、一生懸命女房を口説くのです。私の家内は実は京都の

学校を出て長いこと京都に住んでいたものですから、あれこれ京都の消息をきいているうちに、家内の気もちが大いに動きました、その上息子は京大へ、ひとりの娘は京都府大、いちばん末の娘が、これまた立命館の文学部へ入りまして、子どもがみんな京都へ行ってしまった。それでとても安月給で、二つの世帯をもってやるわけにいかんし、そこへ晴丸さんのすずめのタイミングもよかったし作戦も図にあたったものですから、それで私も、そんならもう行こうという決心をしたわけです。もっともその前に私は、夏に広小路へまいりまして、そしていまは再建が問題になっていますあの「わだつみ」の像、あの像の前に立ったときに私は、自分の一生を託する大学はここしかないという気持ちになったことを申し添えておきたいと思えます。

晴丸さんは、立命館大学というのはどういう大学だということを縷々として説明をして、あとで考えてみますと、彼はけっして嘘を言っていない。率直にありのままの立命館大学の話をしてくれたわけです。つまり学校は貧乏だが、これからみんなが、先生と教職員がいっしょになっていい大学をこしらえていくその途中にあるのだということ率直に彼は語ってくれたわけです。

そのあとで、せっかくだから、広島は魚と酒のうまいところだからひとつ飲みにいこうじゃないかというので、手嶋君と三人でお魚を食って、お酒を飲んだ。だんだん飲むほどに、酔っぱらうほどに晴丸君がいろいろ若いときの話なんかもしてくれました。彼は高等学校を、うらおもて三年のところを五年かかってやっておる。非常にいいねいにやったわけですが、そのうらおもてやったことが、彼にとっては非常に貴重な経験になっているわけです。お兄さんの照丸さん、この方は一昨年でしたか亡くなられた、一つ違いのお兄さんで三高の文科へ入られた。お父さんは兄貴が文科へ行ったんだから、おまえは理科へ行けというので、それで同じ学校へ行くのもどう

かというので、熊本の五高の理科へ入ったんだということです。当時昭和四年というのは日本でも金融恐慌があり、それにつづいて世界大恐慌がおそってきて、日本の農村をはじめとして不況のどん底へたき込まれたそういう未曾有の経済の変動期であった。そしてそれを契機にファシズムが抬頭した。その中にあって彼は「プロレタリア科学」なんかを読んで、大いにマルクス経済学に気をひかれ、マルクスのものをいろいろ読んだというようなことを彼は話した。

さてわたしが立命館へまいりまして、まず感じたことは教授会が非常に熱心に教学討議をするところだということでありまして、どういうふうにしたら学生によく教えることができるか、どういう科目をどういうふうに教えるべきかというふうなことを、教授会で延々として何時間でもやる、まるで高等学校か中学校へきたのじやないかなと思うくらいでした。

私はそんな長い会議にはあまり慣れていないので、それでなんと民主主義というのはしんどいところだなと思って、会議の長いのにへこたれました。余談ですが会議が長くなると、たいてい夕方うどんが出る。うどんが出ると、これまた長い話になってしまう。ですから、もううどんが出やしないか、出やしないかとビクビクする思いでした。そういう状態の中で三八年は晴丸君が学部長、三九年私が来任したときは、学園紛争の中で過労のため亡くなられた高橋良三教授が学部長、その高橋さんが任期の途中でやめられたので、晴丸さんが残任のあと一年学部長でした。そのとき経済学部にはいろいろ問題がありましたけれども、とにかく晴丸さんは教授会でよく一人でしゃべった。学部長が一人でしゃべるのです。そこである先生が教授会のことを井上ゼミナルなどと言ったものです。

わたしは、どうしてこの人はこんなにひとりでしゃべるのだろうかと思つて、はじめはふしぎに思いました。しかしじつと話を聞いてみると、話の設定のしかたに独自のものがあるわけです。これは、私がお葬式のときに弔辞の中でちょっと申し上げたのですけれども、彼ははじめにばあつと大きく輪かくをえがく。頭のいい人だつたらそこで何をいおうとしているか即座にわかる。ところが、ぼくらみたいな新米は、いったいなにを話しているんだらうなと思つておると、また同じ話をします。それで、なんやらわかつてきたないうちに、また同じ話をしてくれる。それで三べんでも、四へんでも、とにかく同じことを話しているうちに、はじめて、ああこれはこういう顔であつて、ここにアクセントがおいてあつて、それはだれの顔であるということがわかるような、そういう話になつてくるわけです。

私はこれをデッサンの話法というふうにいっておるのですけれども、その話のしかたというのが、実は繰り返して、繰り返し話をするところにたくまざる説得力をもつておる。わたしは何か話しをするとき、なんだか二度目に話をしているような気がして気がひけるのですが、晴丸さんはちつともそんなことを気にしないでそこを実に克明になんべんでも、とにかく相手がうんというまではやるといふところがあつた。それを教授会でやるわけです。

晴丸さんのあとわたしが学部長をやリ、教授会を短くする提案をしまして、それでやろうとしたんですが、短くすればするで、議題が次々と出てきますし、どうしても丁寧に議論しておらんものだから、いたるところで頭をこつこつ打つて、やはり晴丸式にやらにゃいかなんということを悟つたわけです。

四二年、私の学部長のときに彼が心筋梗塞で倒れました。その倒れる前に彼が私にこういったことがあるんで

す。どうも近ごろ腹がたつていかん、よく奴鳴るといふのです。それでぼくが、それはいかん、奴鳴ったりすると軀のために悪いから、どならんようにしなくちやいかん、というとな彼は、いやそうじゃないんだ、病気があるから奴鳴るんだと、こういふふうにいふのです。このあたりは非常に唯物論的でありまして、とにかく自分のからだの悪いところがそういうふうにならぬと、そういうふうにならぬと彼はちゃんとらえておつたわけです。

実はなくなる日一〇月五日、晴丸君と約束があつて、来年やめたら同じ大学へ行くんだから、ひとつ最後のことをいろいろ話をしておこうじゃないかというので、それで晴丸さんと研究室で三時間ほど話をした。そのときに彼がまた同じように、近ごろぼくはすぐ怒つていかん、実はゆうべもあることでおこつたんだというものですから、また私がうっかり、おこつてはいかんぞ、からだのために悪いからといったら、いやそうじゃないんだ、やっぱり病気のせいなんだと彼がいう。それを私は冗談のように聞いておつたのですが、その日の晩の一〇時過ぎに彼がなくなつた知らせを聞いたときに、ほんとうに彼がもうすこし早く休養すべきであつたのではなからうかと、たまたまその日彼は、授業がすんだら横浜のお家へ帰るといつておつたんで、まさか一〇時過ぎまで彼が京都におるとは夢にも思わなかつたのです。

晴丸さんは非常に若々しい人でした。さきほど晴丸さんが非常に若々しかつたということをいわれましたけれども、そのとおりだと思ひます。そして、その若々しさというのは、彼が絶えず問題をもつておる、絶えず勉強しておるといふことです。人間は、問題をもたなくなつたときには年をとつてしまいます。だけれどもいつでも問題をもつておるときには、ひとはつねに若々しい。それがまさに彼の場合についていえるだらうと思ひます。彼の著書や論文は、実におびただしい数にわたつておりますけれども、それを貫いて一本の原則的な立場という

ものを彼は保持しながらいろんな問題をとり上げているということ、このことが彼をして若々しく、年をとっておつても青年のような気分させたのだらうというふうに私どもは感じておるわけです。

よく晴丸君が私にいました。私はどつちかといいますと、小さいときからよくおやじやおふくろに、あんたはお兄ちゃんだからしんぼうせにゃいかんというので、なにごとによらずしんぼうせえ、しんぼうせえでやられたものですか、ひっ込み思案になりました、そしてややもすると、逃げよう、逃げようとするわけです。すると晴丸君がいつもぼくに、切つて、切つて前へ出るということをいつもいふのです。もう絶対に逃げられぬのだから、もう前を切つて開いて出ていくよりほかにないのだということをぼくにいったわけです。この一面に彼の非常に積極的な若々しいエネルギーと、それからいつも問題をもつておつて、それに取り組んでいこうということが見えると思うのです。私は、ほんとうにそういう意味から申しますと、私のいちばん欠点をよくつかんでおるのは彼であるというふうに感じたわけです。

晴丸さんの純真さは、ときに不作法な形になって出てきます。たとえば、話をしている最中に大きなおならをしたりして、それで知らん顔をしている。それではじめは、なんだこの不作法な奴と、こう思うのです。ところが彼の書いたものを見ますと、彼が河北であるお偉方の秘書になっていた。よく秘書が勤まったと思うのですが、自分もそう思ったと書いている。そして自分のような不作法な者がよくそういう人のところに使ってもらえたと思うと、その人は偉かったといつて、その人をものすごくほめて書いてある。

私は、これは本当だと思う。しかしそのたくまざる不作法さの中に、彼がいい格好をしないところ、つまりありのままを人に見せるといふところ、これがあると思うのです。これはほんとうに晴丸さんの人徳だと思

うのです。

われわれは、えてしていいかっこうして見せようとしています。ところが、次々とバケの皮がはがれていってしまつて、ああ、あいつは結局大したやつじゃないとか、あいつはやはり嘘つきであったとかいうことになるのですけれども、晴丸君はそういうふうにしてははじめから偽らないところがあつた。そのために彼は、人間の裏表がない。だからいっぺん人を信用したら絶対に疑わなかつた。彼も、私も、ちょうど大学を前後して出ているわけです。わたしが卒業したのは昭和七年の三月ですけれども、三月一五日には関西では大学の新聞部がいっせいに根こそぎにやられました。幸いに私はそのとき朝寝坊をしておつて、新聞部へ行っていないかつたものですから、それで根こそぎやる中から逃れたわけです。

ちょうど晴丸さんはその当時東京大学の学生生活をしておつたわけです。ですから、学生のそういう思想運動に対する弾圧の実にきびしいときに、彼がその中をくぐり抜けて、そして農林省へ彼が昭和九年に大学を出るとすぐに入つておりますけれども、それからあとの彼の研究というのは、ほんとうにあぶないところを渡つて、伝い歩きをしながらいくような、そういう生活であつたらうと思つたのです。

終戦のときに、農政局の農業経営課長として民主化を強力に推進した、これはもう本省の課長ですから、地方へいったら副知事になれるような、そういう出世コースですけれども、レット・ページがありまして、彼が二四年についてそれをやめている。

やめて、そしてさきほどさせるの話がありましたけれども、それから一〇年ほど彼が文筆活動をやつたわけです。おそらく私だつたらダウンした。しかし彼は、持ち前の剛情がまんな、そういう気もちが働いていて、それ



でもってその苦しいところを切り抜けていったのだらうと思います。

ですから、彼はそういった弾圧と反動の中で人を見抜く、一目見て、これはどういふ人間かということを見抜くほんとうに鋭い眼力をやしなつたものと思います。

いっぺん信用したら、絶対にその人を疑わないといったような、そういうところがわれわれをして大いに晴丸さんを信頼し、そうして晴丸さんと一緒ならできただけのことをしなくちゃならないといったような、経済学部の一致協力した気もちを育て上げたのだというふうに思っております。

晴丸さんと私の教授会での応酬はよく漫才みたいになりました。べつにふたりとも漫才をやるつもりじゃなかったけれども、奇想天外な着想でもって彼が話をするものですから、一見みんな煙に巻かれてしまふ。そしてきちんと話が落ち着くところへ落ち着くというわけです。私は、残り任期はわずかですけれども、公私にわたって私の相談相手であつた晴丸さんを失つて、ほんとうにからだ半分ぶつ飛ばされたような、そういう思いがしております。

けさも研究室にいますと、櫛や銀杏のみみじが実にきれいな色で、彼は絵が上手だったし、好きだったから、生きていたらどんなにか喜んであそこの研究室から眺めたことでしょうか。

逝きしはや櫛もみづる間も待たで

これは拙い一句ですが、それを彼の霊前に供えて、思出のほんの一半ですけれども語らせていただいたわけです。つつしんで晴丸さんの冥福をお祈りします。